

「ナガサキ原爆写真展」



8月1日から3日間、第二回「ナガサキ原爆写真展」を長与町のJR長与駅コミュニティーホールで開催した。

台風の影響で、中日の来場者は少なかったものの、3日間で計380名余の方が訪れた。



子供たちのメッセージ



夏休み期間中ということもあり、多くの小中学生の見学があった。そこで、平和に対する思いを表現してもらおうと、色とりどりのカードを用意した。

『世界平和』『命』『笑顔』『幸せ』子供たちの言葉は素直で自由である。三歳にも満たない男児は笑顔の家族の絵を描いてくれた。平和な現在だからこそ描けるメッセージなのかもしれない。

それらの中で『「平和」とは何なのか。今、子供が考える必要があると思う。』との男子高校生の一文が目にとまった。この写真展が現状を見つめ、平和について考えてくれるきっかけになれば、と願った。

話題

写真展では、訪れる方との様々な出会いや発見がある。

今回も一人の女性が、「自分は報国隊として大橋兵器工場で被爆した。だが、周りで生き残ったのは一人だけ、これまで辛くて話をするのは数十年ぶりだ。」とその日の情景をひとつずつ確認するようになりながら語ってくれた。

それは、「被爆、父や友の死、病との闘い。」辛い内容であった。その体験が悲惨なほど言葉にならない方は多い。しかし、それを乗り越えた言葉には無限の重みがあり、力がある。六十二年目の今となっては、原爆祈念日でさえ家族の会話に「原爆」の話題がのぼることは少ないのではないかと、心配になる。

彼女の体験を聞き、その想いを受け継いでくれる新しい芽が育ってくれることを願わずにはいられなかった。



また、別の方からは「長崎大学の慰霊碑はどこにありますか？」とお尋ねがあった。お話を伺うと「祖父は大学の事務職員で構内で被爆死したが、祖母は被爆以前に亡くなっており、家には何も残っておらず、最期の場所さえ不明なのです。」と言われる。長崎大学とは、当時の長崎医科大学である。

その日は可能な限りの調査をお約束し、最終日に、長崎医科大学原爆記録集より、故人の名前の記載があるページや職員の様子が書かれた手記のコピー、大学構内にある芳名碑のお名前の箇所の写真等をお渡しすることができた。

「両祖父母を早く亡くし、このような形ではあるが、初めて祖父の存在を感じた。」と目を潤ませ「帰って母に見せませす。」と足早に去っていかれた。



**真珠湾雷撃の里での原爆展
(三菱造船所昭和寮)**

照りつける太陽の中、白髪や禿頭の方々が慰霊碑の前に集い、六十二年前焼け爛れ針鼠のようになりながら、水を求めてさ迷い、亡骸も骨も知られず散り果てた仲間たちの慰霊祭に参列されました。

今回は被爆直後の兵器大橋工場(大橋町)、県立盲啞学校工場(橋口町)、三菱工業青年学校工場(浜口町)、城山国民学校、兵器茂里町工場、造船幸町工場等の写真を展示、被災者が救援列車に群がる様子を描いた絵(西町踏切・寺井邦人画)も併せて展示しました。参加者は写真や絵を見ながら当時を偲び、仲間を思い暇を潤ませていました。

造船所の要望で展示は十六日まで行いました。寮生は大卒の県外者で、自分達の生活の場が、破壊と受難の場であったことを知り、認識を改めたそうです。長大文教キャンパスの学生達も知らない方が多いのでは、と思いました。

なお慰霊碑横の芳名碑には、市内最多の殉難者名が刻まれています。

長崎造船所所員一、二六九名
長崎兵器製作所所員一、七二七名(含徴用工・女子挺身隊員と所員)、

学徒報国隊員一、二三七名(造船・兵器両方の学徒犠牲者)

総計四、二二三名

※詳細名簿を室園が保管しています。

【室園久信】



県外原爆写真展

毎年、全国で開催されている「県外原爆展」、本年最初の原爆展は四国の高知市で開催された。八月六日から十五日までの九日間、郷土の偉人・板垣退助にちなんで建てられた市立自由民権記念館で開催された。

四回目の「県外原爆展」参

加、これまでの開催都市ではただ広いだけでまとまりのない会場があつたが、高知展の会場はこじんまりとした良い雰囲気だった。初日オー・ピングセレモニーには地元テレビ局三社、新聞は数紙が取材に来ていた。地方での開催にはマスコミの関心が高いようだ。期間中、一千人余りの市民が訪れたというが、山端庸介氏撮影の“浦上駅ホームで爆死した母子”の写真を見つめていた若い主婦は、「やはりここで見る写真は違いますね、原爆はむごい」と涙ぐまれていた。なお語り部は谷口稜曄氏が出席、初日の午前と夜の二回、被爆体験を語られた。

【堀田武弘】



今月の一枚

三菱長崎兵器製作所住吉トンネル工場



空襲に備えて赤迫・住吉地区にまたがる山腹をくり抜いて、6本のトンネルが作られていた。

(現在、住吉側からトンネルの様子が見られる。)

撮影：1946～47(昭和21～22)年頃 撮影者：石田 寿

本のご紹介

田賀井篤平東大総合研究博物館名誉教授の著書第二弾、「石の記憶 ヒロシマ・ナガサキ」が七月二五日、智書房より発行されました。定価一、二〇〇円(十税)です。お求めは市内各書店で。



写真調査部会では、皆様のご意見・ご感想・ご質問などお待ちしております。

